

2019年度 東京の部・北海道の部 報告書

2019年9月9日(Mon.) → 9月23日(Mon.)

東京大学文学部夏期特別プログラム

Report on the Special Summer Program between the University of Tokyo Faculty of Letters
and the Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures, September 9-23, 2019
in Tokyo and Hokkaido

卯原内サンゴ草群落地・網走市能取湖南岸



目次

1. 巻頭挨拶	
「初めての異文化体験」	
東京大学大学院人文社会系研究科長・文学部長 大西 克也	2
Foreword to the Summer Program 2019	
Prof Simon Kaner	3
Executive Director and Head of Centre for Archaeology and Heritage Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures Norwich, UK	
2. サマープログラムの概要	4
3. プログラム実施内容	5
4. 受講者レポート	
① Summer Program 2019 diary	10
② Thematic Report	17
Evie Bruton	【University of East Anglia】
Robert Sizer	【University of Cambridge】
Tanya Pei Fang Lee	【SOAS】
William Brady	【University of Kent】
③ 日誌形式レポート	22
④ テーマ別レポート	28
伊東 希々	【教養学部1年】
野田坂 秀陽	【教養学部1年】
福田 建	【教養学部1年】
松浦 流音	【教養学部1年】
安井 靖雄	【文学部4年】
5. 総括	
夏の本郷と常呂	
東京大学大学院人文社会系研究科・教授 佐藤 宏之	32

1 卷頭挨拶

初めての異文化体験

この挨拶は、9月9日に私が開講式で行うはずのものでした。前日の9月8日夜、関東地方は台風15号の直撃を受けました。翌日は自宅のある鎌倉と東大との間の交通が途絶し、停電した自宅で暑さに耐えるしかありませんでした。しかしプログラム自体は開講式に多少支障が出たものの無事終了し、安堵しています。関係者の先生方、事務方みなさんのご尽力に感謝の意を表しつつ、ここに挨拶文を掲載させていただく次第です。

みなさんこんにちは。東大文学夏期特別プログラムによろこそいらっしゃいました。はるばるイギリス、ヨーロッパからきてくださった皆さんには、日本の文化、そして東京と北海道に関心を持ち、東大の学生とともに学ぶこのプログラムに志願されたことを大変うれしく思うとともに、歓迎の意を表します。

私は古代の中国を研究対象としています。子供の頃から中国の古い文化に憧れをもってきました。初めて中国に行ったのは1984年2月、大学3年生の時でした。飛行機がところどころ枯草の生えた空港に着陸し、はじめて目にしたのは滑走路わきを自転車で走る人の

姿でした。その風景を見ながら、これほど期待していた中国に何の感動もしないことに戸惑いを覚えました。この不思議な感覚はずっと心の中にわだかまりとして残り続けましたが、かなり後になって何となくそのわけがわかりました。私が期待していたのは、中国の文化を肌身で感じとることでした。文化に対する感動は、美しい景色を見て感動するのとは違います。文化を自分自身の中で理解する座標軸が必要です。そのような座標軸が当時私には何もなかったのです。

様々な情報が容易に得られる現在、ヨーロッパから来られた皆さんも、日本の皆さんも常呂と東京についての座標軸をある程度持っていらっしゃることと思います。しかしその座標軸は常に揺らぎを生じます。文化的背景の全く異なるみなさんがともに学び交流する中で、同じものを見ていても座標軸が全くことなることを発見し、揺り動かされることを体験することでしょう。そのような揺らぎと摩擦を大切にしてください。2週間という短い期間ですが、健康に気を付けて、充実した時間を過ごしてください。このプログラムが、皆さんにとって、新しい視界が開けるきっかけになることを願っています。

東京大学大学院人文社会系研究科長・文学部長

大西 克也



Foreword to the Summer Program 2019

It is a great pleasure to introduce the report for the latest Sainsbury Institute – Faculty of Letters, University of Tokyo Summer Program. The Summer and Winter Programs, jointly run by the two institutions, are offering a very valuable introduction to cultural heritage in the two countries, along with expert insights into how cultural heritage is conceptualised and managed in Japan and England. At the same time, the programs provide a unique opportunity for students from the University of Tokyo and universities across Europe and elsewhere to spend a fortnight together, sharing experiences and bonding through a common appreciation of the importance of cultural heritage. We are doubtless very fortunate in England and Japan that cultural heritage is highly valued, and that secure frameworks are in place to protect, conserve and study that heritage, both tangible and

intangible. We cannot take these frameworks for granted. In many parts of the world, cultural heritage is under threat. Despite the best efforts of both local and international agencies and countless dedicated individuals, the impact of war, natural disaster and looting means that each year irreplaceable treasures are lost. Exchange through cultural heritage offers wonderful opportunities to enhance mutual intercultural understanding on many levels. I am sure that all of the graduates of these programs will find themselves in influential positions in whatever career they pursue. It is our heartfelt hope that the memories they acquire during the programs inspire them to advocate respect for cultural heritage wherever they encounter it. We also hope that they will continue to both make use of and contribute to the network of graduates of the programs of which they are a part.

Executive Director and Head of Centre for Archaeology and Heritage
Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures
Norwich, UK

Professor Simon Kaner



2 サマープログラムの概要

実施期間	● 2019年9月9日(月)～9月23日(月)
内 容	● 前半：本郷キャンパスでのプログラム(9月9日～9月15日) <ul style="list-style-type: none">▶江戸東京博物館、日光東照宮、日光山輪王寺本堂、日光山輪王寺大猷院、野毛大塚古墳、多摩川台古墳群、インターメディアテク、東京国立博物館等、歴史系博物館・歴史文化遺産の見学▶谷中・根津・千駄木地区での下町文化に関するグループワーク▶東京国立近代美術館、サントリー美術館、泉屋博古館分館等、美術館の特別展・常設展等の観覧 後半：大学院人文社会系研究科附属常呂実習施設(北海道北見市常呂町)でのプログラム(9月16日～9月23日) <ul style="list-style-type: none">▶擦文文化(11世紀頃)の竪穴住居跡 遺跡発掘体験(北見市大島1遺跡)▶北見市、網走市、斜里町周辺の遺跡、博物館の見学▶世界自然遺産知床の見学▶勾玉製作体験・土器接合体験等、考古資料の製作・整理実習
担当講師	● 設楽博己(大学院人文社会系研究科 教授) 熊木俊朗(大学院人文社会系研究科 教授) 松田 陽(大学院人文社会系研究科 准教授) 高岸 輝(大学院人文社会系研究科 准教授) ライアン ホームバーグ(大学院人文社会系研究科 特任准教授)
募集方法等	● 2019年4月に大学院人文社会系研究科ならびにセインズベリー日本藝術研究所のwebsite等により告知。選考後、6月中旬に通知。
受講者	● 本学の学部学生5名(前期課程学生4名、後期課程学生1名)、セインズベリー日本藝術研究所からの派遣学生4名
支援者 (プログラムに同行)	● 夏木 大吾(大学院人文社会系研究科 助教) 國木田 大(大学院人文社会系研究科 特任助教) 朝比奈伸一(大学院人文社会系研究科 事務部図書チーム主査) 藤田 司(大学院人文社会系研究科 事務部教務係長) 中尾 倫子(大学院人文社会系研究科 事務部総務チーム) 山本 総光(大学院人文社会系研究科 事務部財務・研究支援チーム) 杉江 祐里(大学院人文社会系研究科 事務部大学院係) 張 恩恵(大学院人文社会系研究科 博士課程大学院学生) 雨宮 健祥(大学院人文社会系研究科 修士課程大学院学生) 野中 愛理(大学院人文社会系研究科 修士課程大学院学生) リー・カーファイ(大学院人文社会系研究科 修士課程大学院学生)
協 力	● 北見市教育委員会等

3 プログラム実施内容



開講式（法文2号館でのガイダンス風景）

東京の部

プログラムの前半では東京に滞在しながら、日本の歴史文化遺産の全体像の把握に努めた。初日のガイダンスでは大西克也研究科長、佐藤宏之教授が受講者を歓迎し、プログラムの趣旨説明を行った。その後、受講者たちが英語で自己紹介を行い、各人の抱負を語った。二日目以降は、本郷キャンパスでの座学、都内および近郊の博物館・美術館や史跡等への訪問実習を行いながら、日本の歴史文化遺産の多様な側面を学んだ。受講者たちは本郷キャンパス近くのホテルに泊まりながら課題をこなし、日本と海外との壁を超えるかたちで親交を深めた。また、セインズベリー日本藝術研究所所長サイモン・ケイナー教授が来日中であったため、参加学生と交流する機会も持った。プログラムの最終日には、各受講者がそれまでの活動をまとめたレポートを作成した。

● 本郷キャンパスでの座学と見学実習

設楽担当講師が日本の先史時代（旧石器、縄文、弥生、古墳時代）の考古学の概要を1時間半ほどかけて説明した。続いて、同担当講師による解説の下、文学部考古列品室にある



本郷キャンパスでの座学と見学実習（担当講師による考古学の座学）

資料を1時間ほど掛けて丁寧に見て回り、座学で学んだ考古学の知見をモノの理解を通して強化することに努めた。受講者たちは、座学で学んだ考古遺物を、すぐに手にとって体感することができ、講義内容を深めることができた。

また、日本郵便株式会社と東京大学総合研究博物館の協働によるミュージアム「インターメディアテク」のコレクションも見学した。同博物館は、東京大学が1877年の開学以来蓄積してきた学術標本を展示している。受講者は収蔵コレクションとともに、最先端の学術環境にもふれることができた。

● 博物館・美術館での実習

考古学や美術史学はモノないしは作品を通して過去を探求する学問であることを意識し、東京滞在中は博物館・美術館にて実物の資料を見て学ぶ機会を多く設定した。訪問した館は、江戸東京博物館、インターメディアテク、東京国立博物



博物館・美術館での実習
（江戸東京博物館で解説を受ける参加者）

館、東京国立近代美術館、サントリー美術館、泉屋博古館分館（訪問順）であり、高岸担当講師、松田担当講師が分担しながら解説を行った。期間限定の特別展を見る機会もあり、東京国立近代美術館では「高畑勲展－日本のアニメーションに遺したもの」展、サントリー美術館では「黄瀬戸・瀬戸黒・志野・織部－美濃の茶陶」展、泉屋博古館分館では、住友財団修復助成30年記念「文化財よ、永遠に」展を見学した。海外から

3 プログラム実施内容



浅草寺・雷門をバックに記念写真

の受講者にとっては、これらの博物館・美術館での見学実習は日本の歴史文化遺産と歴史全般を学ぶ良い機会ともなった。

● 歴史文化遺産サイト訪問

歴史を学ぶ上では、実際の地理的空間に結びつけながら考察を進めることが重要であるとの認識に基づき、東京滞在中には歴史文化遺産サイトも積極的に訪問した。訪問したのは、浅草、日光、上野公園である（訪問順）。浅草訪問は、浅草寺という今日の東京を代表する歴史文化遺産が、今日どのように社会的に受容され、また使用されているのかを直接体験しながら学ぶ機会となった。半日かけて行った日光訪問では、日光東照宮と日光山輪王寺本堂・大猷院を見学した。日光東照宮では、修復を終えたばかりの陽明門を見学することができ貴重な機会となった。上野公園では、松田担当講師が公園内の建築物、彫像や記念碑の説明を通して、日本文化の解説を行った。等々力渓谷と野毛大塚古墳を訪問した際には、東京23区唯一の渓谷を体験し、それから造営時の姿に復元された古墳の墳頂に登って、古墳文化についての理解を深めた。また、多摩川台古墳群もあわせて見学した。

● 谷中・根津・千駄木でのグループワーク

本プログラムでは、本学部学生とセインズベリー日本藝術研



谷中・根津・千駄木でのグループワーク
(六義園・吹上茶屋にて抹茶で休憩をとる参加者)

究所の協力により選抜された海外の学生との国際交流も目的となっている。東京大学に近い下町である谷中・根津・千駄木エリアを、受講者たちが中心となってグループワークを行った。本学部学生と国外の学生とを合わせた2グループで、それぞれ訪問する歴史文化遺産などを自由に決め、東京下町の文化について主体的に学んだ。各グループでは、書道博物館、朝倉彫塑館、六義園、根津神社などを訪問し、その歴史文化遺産の歴史や意義について学んだ。本学の受講者が海外の学生にレクチャーする場面も多くあり、英語で議論する良い機会となった。

常呂の部

プログラムの後半では北海道に移動し、人文社会系研究科の附属施設である常呂実習施設で北海道の歴史遺産と自然遺産について体験的に学んだ。常呂のプログラム中は施設に附



学生宿舎にて食事風景

属する学生宿舎に宿泊し、自炊もしながら課題に取り組み、受講者同士や参加スタッフ、そして地元北見市常呂町の支援者との交流を深めた。期間中、天候不順により発掘体験の時間が短縮されるなど、若干の予定変更もあったが、概ね予定どおりプログラムは進行した。最終日には各受講者がレポートを提出し、担当講師から修了証の授与がおこなわれた。

● 北海道の先史文化概説（講義）

常呂でのプログラムは、「北海道の歴史遺産と自然遺産について体験を通じて学ぶ」ことを主眼としている。プログラム全体への理解を深めるため、熊木担当講師が北海道の先史文化の概要について講義をおこなった。縄文時代以降、本州とは異なる歩みをみせる北海道の先史文化の特徴について、続縄文文化から擦文文化、そしてアイヌ文化の成立に至る流れを、本州やロシア極東との交流関係にも注目しながら順を追って紹介した。受講者からは、アイヌのクマ送り儀礼を記録した文献に関する質問がなされるなど、特にアイヌ文化に対する関心の高さが目立ち、このプログラムに対する期待の高さがうかがわれた。

● 遺跡出土土器の接合体験

遺跡から出土した土器の破片を接合する作業の体験を通じて、考古学研究の方法について実践的に学んだ。遺跡出土の土器片について1点1点文様を観察して型式毎に分類し、ジグソーパズルを合わせる要領で破片同士の接合を試みる作業をおこなった。教材となる土器片については、接合実習用に作成された土器のレプリカと、実物の続縄文土器を北見市教育委員会から借用した。レプリカによる体験では接合は容易であったが、実物では簡単に接合できるような破片は少なく、根気が必要とする難易度の高い作業となった。熊木講師から接合する際に着目すべき点について助言を受けた受講者は、



遺跡出土土器の接合体験（協力し合い、接合を試みる参加者）

互いに協力しながら課題に取り組み、いくつかの土器片を接合することができた。実際の遺物整理ではこの作業を数ヶ月も続けるという説明を受け、受講者は考古学研究や埋蔵文化財保護にかかる労力について実感できた。

● 勾玉の製作体験

縄文時代の勾玉を実際に製作する体験を通じて、古代の技術や造形に対する理解を深めた。題材としたのは常呂の遺跡から出土した縄文時代のヒスイ製の勾玉で、実際の製作では加工しやすい滑石を材料とした。各受講者は滑石に好きな勾玉の形を転写した後、約2時間かけて手作業で削って磨きを

かけ、1個の勾玉を完成させた。また、製作作業にあわせて、当時の加工技術や原材料と製品の流通についても熊木講師から説明がなされた。講師から当時の原材料であるヒスイを加工する場合には滑石よりも遙かに労力を必要とすることが説明され、受講者は、縄文時代の技術と、勾玉が「威信材」として評価される背景についても理解することができた。

● 実習施設周辺の遺跡見学

実習施設の周辺には、国指定の史跡「常呂遺跡」を中心として大規模な先史文化の遺跡が数多く存在している。このうち、史跡「常呂遺跡」の各地点（ところ遺跡の森地点、栄浦第二遺跡、トコロチャシ跡遺跡）とトコロ貝塚を見学し、遺跡の保護



実習施設周辺の遺跡見学
（ところ遺跡の森にて竪穴住居跡の見学）

と活用に対する取り組みを実例で学んだ。遺跡では、地表面に窪みで残る竪穴住居跡や、復元された竪穴住居、アイヌ文化の砦の跡に掘られた壕の様子を見学した。また、トコロ貝塚ではカキなどの貝殻が、トコロチャシ跡遺跡では石器や土器が地表面のあちこちに露出しており、それらに現地で触れることによって歴史遺産の存在を体感することができた。

● 世界遺産 知床見学

世界遺産に登録されている知床を訪れ、自然遺産への登録理由となった多様な生態環境とその相互関係、豊かな生産性という特質を実見するとともに、自然の保全と人の利用との両立を目指す保護と管理のあり方についても学んだ。斜里町



世界遺産 知床見学
（知床博物館にて担当講師より解説を受ける参加者）

3 プログラム実施内容

ウトロまでの行程を含む移動は全て車でいき、斜里町立知床博物館、知床世界遺産センター、知床峠、知床五湖、オシニコシンの滝といった主要地点を巡回した。受講者は火山、森林、湖沼、断崖などの多様な景観に触れながら、それらの具体的な保護管理の方法を現地で視察した。当日の知床は天候がや



世界遺産 知床見学（知床五湖にて記念撮影）

や不安定で、知床峠では周囲の風景が全く見えないような濃霧に、また知床五湖では集合写真の撮影が困難なほどの強風に遭遇したが、それも自然遺産登録地の環境を体感するよい経験となった。

● 博物館見学

実習施設の近隣に位置する各博物館、具体的には、ところ遺跡の館、常呂町郷土資料館（以上北見市常呂町内）、北海道立北方民族博物館、網走市郷土博物館、モヨロ貝塚館、博物館網走監獄（以上網走市内）を見学した。これらの館はいずれも地域の特色ある歴史や文化を紹介した博物館であり、

受講者は展示資料を見学しながら、地域の歴史遺産について理解を深めた。

● 遺跡発掘体験

常呂町内に存在する「大島1遺跡」において遺跡の発掘を体験し、考古学の調査と研究の方法について学んだ。大島1遺跡は、擦文文化期及び続縄文文化期とみられる竪穴住居跡が窪みで残る集落遺跡である。発掘は、昨年度に発掘体験を実施した調査トレンチ二箇所について、継続調査をするかたちで行われた。調査の目的は、トレンチ内の土層堆積の観察と遺物分布状況の把握である。発掘体験は9月20日の全日にわたって実施される予定であったが、当日雨天のために、翌21日の午後からに変更して実施された。受講者は調査トレンチ内の土を掘り進め、更新世に堆積したとみられる土層まで到達した後、講師の指導のもとに土層堆積の変化を観察した。本年度はどちらのトレンチ内からも土器や石器は確認されなかったが、トレンチの周囲の地表面などで発見された土器や石器などを回収した。雨天による時間短縮は残念であったが、発掘調査に初めて参加する受講者も多く、考古学研究を実地で学ぶ貴重な経験となった。

● マンガにおけるアイヌ像（講義）

ホームバーグ講師が「マンガにおけるアイヌ像」と題した講義をおこなった。講義では、アイヌが主要な登場人物として描かれている『カムイ伝』（白土三平）、『熊祭の乙女』（つげ義春）、『ゴールデンカムイ』（野田サトル）といったマンガが紹介され、これらのマンガについて、ストーリーの解説、作者の思想やアイヌ文化に対する知識と表現、アイヌに対する社会のまなざしとその変遷、マンガ表現における文化的・社会的な背景などの観点から、考察がなされた。受講者は、取り上げられた題材を通じて、近現代の日本社会におけるマイノリティーの置かれた立場や、マンガでそれを表現することのもつ意味などについて学んだ。



遺跡発掘体験（「大島1遺跡」にて記念撮影）

東京の部



常呂の部



4 受講者レポート ①

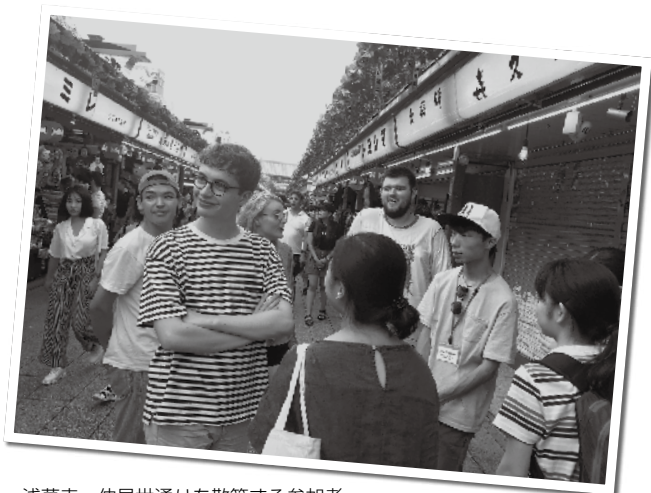
■ Summer Program 2019 Diary

Evie Bruton, Robert Sizer, Tanya Lee, William Brady

Tokyo part

Day 1, 9th September

On our first day we arrived at the University of Tokyo (Hongo campus), where we were briefed about our stay in both Tokyo and Hokkaido and had a short introductory session among the program participants and professors from the University of Tokyo. It was unfortunate that not everyone was able to turn up for the briefing session due to the disruption caused by the typhoon that



浅草寺・仲見世通りを散策する参加者

morning. Even getting to the hotel where we were staying was difficult. Thankfully however we all managed to reach the hotel eventually. After freshening up, we headed towards Sensoji (Asakusa Kannon Temple). We were amazed by the scale of not only the temple but the crowd of people visiting the site. In the evening we then had a proper washoku experience for dinner and it was really delicious if somewhat daunting. After dinner, as a group we went to Ameyoko for another meal and enjoyed trying out the local delights and bonding with the group.

Day 2, 10th September

We had the experience of Japanese teishoku for breakfast which was quite a lot to

stomach early in the morning for some. Our first visit for the day was the University of Tokyo (Hongo campus) where we had a lecture by Professor Hiromi Shitara. This gave an overview of the Jomon, Yayoi, and Kofun periods in Japan and Hokkaido. The lecture gave us a much clearer idea of the distinctions between the various periods. After the lecture, we went into the one of the university's archive rooms where we got to see the different artefacts of the various periods discussed during the lecture. It was really exciting to see these artefacts up close and personal, as in the UK there are not many opportunities for such up-close experience and exposure with east Asian artefacts.

After lunch, we went to the Edo-Tokyo Museum where we got to know more about the Edo period under the Tokugawa rule. We had a volunteer guide who spoke great English to give us a better overview of the period and what the socio-political environment was like during the period. After the museum we decided to make a quick trip to the Tokyo Skytree which was made the tallest building in Japan in 2010. The building and area itself was really



本郷キャンパスでの座学と見学実習
(考古学列品室で担当講師から解説を受ける参加者)

spectacular. We found a Moomin-themed cafe and enjoyed hot drinks while accompanied by a large stuffed Moomin seated at our table. For dinner, we then had western-style food at the hotel and then went out to an izakaya for a second dinner of sorts.

Day 3, 11th September

Wednesday started a little earlier than previous days - so early that some of us decided to skip breakfast in favour of those extra few minutes in bed! We took a two-hour train ride to Nikko which is a beautiful mountainous town. There we saw a Shrine complex called Nikko Toshogu Shrine where



歴史文化遺産サイト訪問
(日光東照宮 陽明門にて記念写真)

the first shogun was deified. Professor Holmberg joined us on this trip, acting as a vital translator for us UK participants. Professor Holmberg took us around Nikko and explained the cultural and religious significance behind the sites situated within the area. Whilst it was unfortunate that it was raining during our time in Nikko, such a weather did add to the spiritual ambiance to our visit. After we finished the planned activities for the day, we went back to Asakusa. Here we wandered the streets and went to a Japanese izakaya where the older students (over 20!) tried saké.

Day 4, 12th September

oday was a later start than yesterday, thank goodness! We headed out to the Noge Otsuka Burial Mound located in Setagaya, Tokyo. We

had the privilege of Professor Matsuda's company from the University of Tokyo to explain to us the life history of this burial mound which, as we discussed, was missing from the description on the signage of the site. After that, we headed for a stroll around the Todoroki Valley Park, which is a natural site. This sits in complete contrast with the hustle and bustle of central Tokyo. For lunch, we tried curry ramen which we enjoyed very much, especially in this mild weather.

After lunch, we headed towards the Tamagawadai Kofun Park, where Professor Matsuda explained the history of the site. We ended our visit to the area with the Tamagawa Sengen shrine. This is a shrine dedicated to the deity of Mount Fuji. The area is a beautiful sightseeing spot, with a stunning view of the Todoroki area. These panoramic landscape views made it easy to guess why this place was selected for worship. During our visit to the shrine, a Shinto wedding was taking place. The shrine was decorated accordingly, which was a charming addition to our experience of the site. After the visit, we went to the Intermediatheque museum which is a joint venture between the Japan Post Co. Ltd and the University of Tokyo. Despite its location in a shopping mall, the unique way in which it presents its collections provides a new lease of life to artefacts; with modern sleek styling to continue their educational motive. In the evening, the group took a tour around the University's Hongo campus.

Day 5, 13th September

This morning, we took a stroll around Ueno Park with Professor Matsuda, who pointed out to us key sites around the park. It was interesting to know that even though it was a rather unassuming park, continuously passed through by residents or people heading to other sites, there were a lot of important historical sites in the park. After our stroll,

4 受講者レポート ①

we visited the Tokyo National Museum. The scale of the enormous complex was impressive, so we split off into smaller groups. The museum was filled with numerous displays of artefacts beginning from the palaeolithic and neolithic periods of Japan. Once the official program had finished for the day, we decided to see a traditional Kabuki play. The dance-drama was moving, conveying the universal emotions of family and betrayal. Once the performance ended, we decided to try traditional Japanese sweets (wagashi) at a place near the venue.

Day 6, 14th September

Today we visited three museums: the National Museum of Modern Art, Tokyo, Suntory Museum of Art and the Sen-oku Hakukokan Museum, Tokyo. At the National Museum of Modern Art, Tokyo we saw a retrospective exhibition of a famous legend in Japanese animation: Takahata Isao. It was an impressive exhibition in terms of its scale and content properly charting and documenting the animations he has done from the beginning to the end of his career. It was thoroughly enjoyable watching the animations alongside his detailed storyboards.

Afterwards, we proceeded to the Suntory Museum of Art. Here we saw an exhibition



博物館・美術館での実習 (サントリー美術館にて記念写真)

on Mino teaware. This was an extensive collection of Kisetō, Setoguro, Shino, and

Oribe pottery. We had audio guides which succinctly explained the different wares so that we could get a much better understanding of the technology and the history that went into their making.

Finally, we visited the Sen-oku Hakukokan Museum which showed the restored works from the Sumitomo Collection. Although it was a fairly small museum, the kind of collection they were exhibiting was impressive. We were most impressed by the scrolls depicting various arhats. It was also interesting to see how the museum was sponsored by a major banking firm.

Day 7, 15th September

This day of the program was left entirely open for us to pursue our interests. We were split into two groups. Group A first visited Rikugi-en. The place's name means Garden of the Six Principles of Poetry referring to the idea of the six elements in waka poetry. Here we were given a guided tour of the gardens by a local, Japanese man who had once lived in London. The tour was intended to be for an hour but two hours had soon passed and we had only seen a small part of the gardens! We ended our time in the gardens with traditional tea and sweets.



谷中・根津・千駄木でのグループワーク
(六義園にて庭園ガイドボランティアから説明を受ける参加者)

We then had lunch in a local cat-themed café. Everything from the glasses to the walls were covered in feline designs. Thereafter



谷中・根津・千駄木でのグループワーク（朝倉彫塑館にて記念撮影）

we headed to the Nezu-jinja Shrine where the iconic Torii were truly a delight to behold.

Group B decided to explore the Yanaka-Nezu-Chiyoda area. we first went to a calligraphy museum where we got to learn about traditional Chinese characters (Kanji). The museum was not in a big space but it was very informative and made things easy for us visitors to understand.

After this we proceeded to the second museum; one dedicated to sculpture. This house was originally the sculptor Fumio Asakura. This specially designed space was beautiful and it displayed his collections in an effective manner. At the top of the house, there was a beautiful garden where a few of his larger sculptures were being exhibited. The last stop of the day was to a cat café. It was very fun and the cats were extremely cute. Lastly, we visited 3331 chiyoda, a converted school, which was an interesting concept as an art space encompassing galleries, shops and various dining facilities.

Hokkaido part

Day 8, 16th September

Today we left early for the airport and headed to Hokkaido by airplane. Internal travel in Japan varies drastically from that of our international flight meaning the queue for checking-in our luggage was rather stressful

but we all figured it out eventually. We had our lunch at the airport where we tried bento lunch for the first time. It was a rather overwhelming experience as there was a wide variety of food and everything looked delicious. After our flight we reached Hokkaido, and then we were driven to the Tokoro Fieldwork Station. Here we had a short briefing session.

In the evening, we had an opening reception together and enjoyed a delicious meal of lamb yakiniku as well as potato salad and imodango (Fried potato cake) given by Mr and Mrs Kanazawa (our neighbours living in Tokoro). Many of us then took ourselves for an early night after a tiring day of travelling.

Day 9, 17th September

Our time in Hokkaido began with a lecture



北海道の先史時代についての講義

from Kumaki-sensei, one of the archaeology professors from University of Tokyo, regarding the ancient history of Hokkaido. The differences in the progression of cultures between, Hokkaido and Honshu were briefly explained but in great detail. Reference was made to the production of rice and the influence of China and Korea as factors in Hokkaido's prehistoric culture's development. These seemingly small differences in contact and climate vastly altered the two distinct parts societies of Japan.

After our lecture we were able to experience

4 受講者レポート ①

archaeological work for the first time. We were divided into groups and handed a box of pottery shards. These fragments varied in size, shape and chronological types. Pottery refitting is similar to completing a jigsaw but



遺跡出土土器の接合体験

with no picture to copy and you have lost over half of the pieces. Many excavated materials are found in single units rather than as collective wholes, henceforth a great deal of patience and passion is required to reassemble materials uncovered by archaeologists.

Next we took a tour of the Tokoro Archaeological Museum located next to our accommodation. Displays of the vast number of pit dwellings, which have been excavated are front and centre in the museum. This ongoing work has been undertaken collectively by the University of Tokyo, the University of Hokkaido, and the city of Kitami, all of whom have separate but collaborative records stored within the



附属常呂資料陳列館の見学

museum.

Day 10. 18th September

On this day we visited many museums. On our way to the first museum we stopped at a flower garden to take in the sights and smells of Hokkaido. Our first museum was the Shiretoko Museum, which is a hybrid of a local and natural history museum. It was well categorised into various historical themes, such as “History of Forestry” and “History of Life in Shiretoko”. The museum had an extremely large and rich collection of historical artefacts to look at.

After our trip to the museum we went for a picture stop in the Shiretoko Pass within the wider Shiretoko National Park. After this we proceeded to the Shiretoko Goko Lakes and



世界遺産 知床見学 (知床峠にて記念撮影)

Shiretoko Mountain Range. It was a great view and a moment for us to savour together as a group. On our way back from the park we went to see the Oshinkoshin waterfall, a large waterfall along the coast. This was hugely impressive and we paused to take many photos of the view. This natural wonder was the perfect end to yet another action-packed day.

Day 11, 19th September

In the morning our group gathered at the fieldwork station to try our hands at making Jomon comma-shaped beads. Typically these

would be made out of jade but we used soapstone this time. Jade is a material that is not commonly found in Hokkaido, hence, it can be taken as a evidence of long-distance trading during the Jomon period. To produce these comma-shaped beads we rubbed the surface of the stone with various kinds of sandpaper. Kumaki-sensei drilled a hole in the beads so they could be worn. We were very pleased with our final product of Jomon beads. This activity helped us appreciate the technical skill required to manufacture these artefacts.

After lunch we attended a second lecture regarding the previously excavated Oshima sites by the university and the work and previous Summer Program attendees. This was an exciting preview into our own



大島遺跡についての講義

excavation work due for later in the program. After being inside all day, we went for an adventure to Dioscorea shell-mound. The mound, along the Tokoro River bank, is dated from the middle of Jomon period and is the largest such mound in Eastern Hokkaido.

Day 12, 20th September

Our original plan for today was to excavate the Oshima sites dug by last year's program. With our excavation outfits on and more bug spray than bottles of water, we began our journey to the Oshima site. Unfortunately, as the professors went to purchase some more

mosquito repellent, it began raining. As a result we had to postpone our dig.

Our itinerary was overhauled and new plans were hatched with great speed. In the afternoon, we visited three different museums. The first of these was the Hokkaido Museum of Northern Peoples. Here there were permanent and temporary exhibitions regarding the traditions and cultures of those found in the most northern regions of the world.

After this, we attended the Abashiri Local Museum; which was an eclectic mix of taxidermy animals, including a terrifying display of a family of bears, as well as local history and archaeology. The final museum we visited was the Moyoro Shell Mound Museum. Excitingly, Kumaki-sensei had worked on this mound and was featured in one of the display pictures there. The museum focused on the Moyoro peoples and their distinctive culture, called the Okhotsk. The Okhotsk coastal fishing and hunter-gatherer culture differed from other people in Hokkaido during this period. One notable difference between Okhotsk culture and the more common Post-Jomon and Satsumon cultures is their particular burial traditions. Several adult graves have been discovered



博物館見学 (モヨロ貝塚館にてオホーツク文化に触れる参加者)

with legs bound and human skulls with clay pots placed over them.

4 受講者レポート ①

Day 13, 21st September

Today, we had some fantastic sunny weather. First, we went to the Abashiri Prison Museum. Here we learnt that the prison house was inspired by the Prison de Louvain in Belgium. We also learned about the tough lives the inmates led. This included the types



博物館見学(網走監獄にて)

of activities in which they participated during their time in prison as well as how they washed and were fed. In addition to this, we also watched a wonderfully immersive video about the prison inmates who were forced to help with the construction of the roads in Hokkaido.

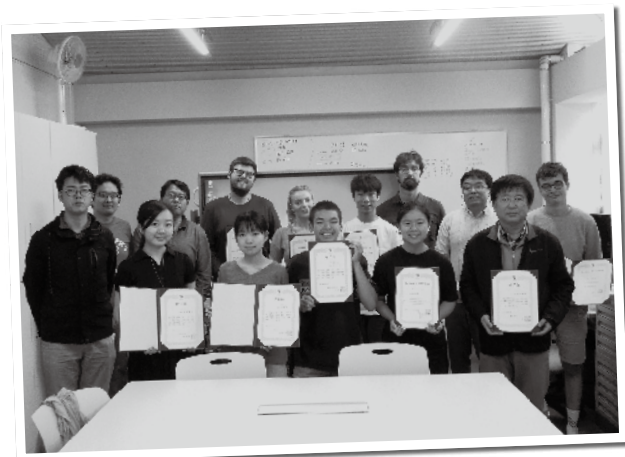
Fortunately for the rest of the day the rain remained at bay. As a result we could finally travel to the Oshima 1 site to excavate. Here we were tasked with excavating deeper on the sites dug during last year's Summer Program. Group 1 were able to unearth great quantities of obsidian within the unchecked dirt from last year's excavation. Group 2 however, were unable to discover any material finds at all! Though the excavation experience was rather short-lived we now have a far better understanding on the process of excavation as well as a further understanding of the kind of soil and terrain qualities within the Oshima site. Once we returned to the accommodation, we came together in the kitchen to watch the rugby - New Zealand vs South Africa.

Day 14, 22nd September

This was the final day of the program. The day started early with everyone cooking breakfast before the morning lecture. The lecture was presented by Professor Holmberg. The theme centred upon the limited artistic representation of Ainu culture in Japanese manga. It was interesting to see how a genre of writing, often looked down on in academic disciplines, could be an interesting lens through which to consider the representation and understanding of the Ainu in post-colonial Hokkaido.

After our lecture we had an award ceremony. We were given beautiful certificates from Professor Holmberg and Kumaki-sensei. We then had a group photo taken after. It was hugely satisfying to see ourselves make it to the end of a wonderful couple of weeks study.

In the afternoon following our bento lunch we worked on our written reports and reflected on our experiences together whilst the teachers prepared a group meal. A couple of the UK participants went on a bike ride along



修了式(修了証を手に記念撮影)

the coast of Lake Saroma to appreciate the natural beauty of Hokkaido on the last day. The food in the evening was delicious. We ate it after watching the Scotland lose to Ireland in the rugby. We then went to bed early before our early start the next day and the program's close.

4 受講者レポート ②

■ Thematic Report

Evie Bruton, Robert Sizer, Tanya Lee, William Brady

Theme 1: Invisible heritage and its interactions with modern life

Whilst in Japan, as international students, we have been struck by the way in which many forms of heritage remain hidden to those who pass-it-by as part of their ordinary life. It has been interesting for us to think about this with respects to how heritage is presented to the public and the consequences of its representation on how it is used by living populations. As is often the case with ancient sites, owing to their lack of easily identifiable and tangible features, they can perhaps slip under the radar of tourists and residents who pass them by. It would appear, from our perspective, that in many cases prehistoric features and monuments go largely unnoticed as sites of historical significance, instead often being allocated new functions in the present day.

An illustrative example of this phenomena would be with Ueno park in Tokyo. Many of us as program participants, both from Japan and Britain, walked through the park in order to reach the Hongo campus of the University of Tokyo. What we learnt through the course of the program is that the park is filled with ancient monuments, which today are blended into the hyper modern Tokyo landscape.



歴史文化遺産サイト訪問
(多摩川浅間神社にて担当講師から解説を受ける参加者)

These burial mounds went unnoticed to nearly us all as they were only signified by small 30cm by 80cm information boards (often only written in Japanese). It appears then that the presentation of heritage is in this case somewhat lacking for many of Japan's ancient monuments.

Arguably, as a result of this ancient sites in Japan become somewhat anonymous; this then leads them to develop new meanings from the populations who interact with them today. This is a result of the fact they know relatively little about the sites' original meaning. For instance, Noge Otsuka Kofun, as a site, has had a varied biography of different meanings. Professor Matsuda outlined to us how the site has shifted in its function since the 19th century to date, from a golf course, through an agricultural land during the second world war, to a public park; all these different functions contribute to the texture of the site's heritage well beyond the Kofun period and their original function as burials. This has led to a change in the biography of the site. There therefore seems to be an interaction between the agencies of both the burial mound as a



歴史文化遺産サイト訪問
(等々力溪谷にて担当講師から解説を受ける参加者)

4 受講者レポート ②

feature and the humans who see and engage with it; perhaps not appreciating (or even knowing) its original significance.

As discussed, the roughly 160,000 kofun sites in Japan take on a range of different functions and meanings in the present day. Perhaps these alternative uses, and the interpretations imposed on them, are a consequence of their



歴史文化遺産サイト訪問
(野毛大塚古墳にて担当講師から解説を受ける参加者)

less visible nature compared to other far more conspicuous sites such as the palaces and temples of Nikko, Kyoto and Tokyo. The question must then be whether the same changes in site meaning and biography would happen at these more visible sites? Does the presentation of sites as objects of heritage shape our understanding of them? It appears from our perspective that the manner in which we perceive a site as being historically significant or not also shapes the way we interact with them.

I suppose what we as a group have come to appreciate, through participation in this program, is that heritage traverses a fine line between presenting the past and the present. Should we privilege those who lived thousands of years ago today or let the modern world supersede the old? Can this be the consequence of how we present and conserve heritage? This program has provoked an interest, and indeed many questions from us, in how we should consider

the challenges posed by presenting and conserving heritage in both Japan and the UK.

Theme 2: The lack of signage and information at Japanese historical sites

During this two-week program, we have come to notice that there is a lack of not only signage for heritage sites but also information pertaining to the more recent historical uses of these sites. We have seen this as a phenomenon in three different areas of Japan that we have visited as part of the trip. This signage is currently lacking much of the more recent life histories of ancient sites, which could interest local residents or visitors further as compared to purely describing the archaeological history and original function of the site alone.

Ueno Park

On our fifth day on the program, we took a scenic stroll around Ueno park. It was rather surprising to us that there were actually many historical sites all around us within the area. The park is one that has been much frequented by local residents and visitors, and is often used as a walkway to get to famous museums. One of the many ancient



歴史文化遺産サイト訪問
(上野公園にて担当講師から解説を受ける参加者)

historical landmarks that we noticed in particular was the Suribachiyama Kofun - this being an ancient burial mound from around 1500 years ago. Materials from the Kofun period were identified in the past from

this particular kofun. Today, the site is often used as a space of leisure. It is interesting to note that the function of such a historical landmark has changed greatly throughout the years and to appreciate the way that people use ancient sites towards more modern ends. It could be of benefit if the signage at the site included further historical interpretation of the park's archaeological history, instead of the rather cold, and impersonal descriptions of the site that we see in the present day. If such descriptions were to be included in the park's signage, perhaps people who visit this site might recognise and further appreciate it for what it truly was.

Noge Otsuka Burial Mound



歴史文化遺産サイト訪問
(野毛大塚古墳にて担当講師から解説を受ける参加者)

During our time in Tokyo, we also visited the Todoroki area where we visited the Noge Otsuka burial mound, where we visited a shrine at its top. At the shrine, we noticed signage which explained about the site but in a more technical and factual approach. This centred on the archaeological history of the space itself. Professor Matsuda further explained to us an interesting legend relating to the site, that long ago a man from the village recovered grave goods from this burial mound and sold them off for profit. This then caused him to become “cursed” as a result of his actions. Hence, a socially dominant person of that village refilled the

exposed kofun and a shrine was subsequently built on top of it. In addition to that, we also learnt from Professor Matsuda that this burial mound is in a scallop-like shape, a variant of a keyhole-shape kofun, which was



歴史文化遺産サイト訪問
(解説資料を示しながら説明する担当講師)

reserved for only the most powerful rulers. Such engaging stories as well as historical facts were not presented to the public in the current signage. The description on the sign was of a more archaeological nature rather than sharing the later historical interpretations of the burial mound. Such information that was omitted would perhaps help visitors to have a better knowledge of the variety of burial mounds, as well as the significance of the site then and now. This information could possibly help visitors better understand how the burial mound has changed overtime. It strikes us that this is a great omission which would be of great relevance for presenting to the public.

Archaeological sites in Tokoro

On our third day in Hokkaido, we visited the archaeological sites of Tokoro. We realised that quite a number of these sites exist alongside spaces that are still used by residents of the local area in the present day. However, whilst we were on our visits, we noticed that there was not much signage at all that suggests the presence of a thoroughly excavated, published and researched archaeological site. It was interesting to note

4 受講者レポート ②

that one of the sites that we visited, a fort, coexisted alongside a modern-day farm still used for the production of food. Indeed, on the farm itself traces of worked obsidian and Epi-Jomon pottery were easily visible to us on the ground surface. Many of the other excavated sites that we visited in Tokoro generally had some simple signage explaining



実習施設周辺の遺跡見学（とことろ遺跡の森の竪穴式住居内）

that they were of some archaeological significance. It is interesting that these, like the sites we saw in Tokyo, also lack information on the more recent histories of these sites. It would help if there was more information about the kind of excavation that was done at these sites and the forms of material culture found within them. Signage in many cases is valuable opportunity to convey knowledge in an easily accessible and low-cost way. In the area of Tokoro, the lack of such information can be seen as a missed opportunity to inform the public of the ancient history of their local area.

Conclusion

In conclusion, Japan has a lot of rich history that is still very current and embedded within today's society and landscape. This could be something that ought to be further appreciated and taught, through the medium of signage, to the local community as well as tourists visiting the area. Hence, it is crucial that the life history of these sites ought to be recounted and narrated to the people to get a better understanding of not only the

places they are in and/or visiting but also the wider historical context of ancient Japan.

Theme 3: The amalgamation of modern and ancient history

On 15th August 1281, the Mongol Yuan Dynasty attempted to invade the isle of Japan. This invasion failed, due to a typhoon decimating the Mongolian fleet. Japan came to call these fortuitous storms “divine wind”, or kamikaze. On our first night in Tokyo, a typhoon hit the island, a near miss for anyone flying into Japan on our intended day of arrival. With this historical precedence of a natural phenomenon foreshadowing our journey, we knew that exciting developments were to come.

The ancient “barbarian” ideology of China placed China at the centre of the universe, while other polities located in the periphery



多摩川から川崎市方面を望む

of China were deemed to be inferior and have to adopt Chinese values and customs. Japanese Palaeolithic culture seemingly fits comfortably into this concept. Many technological advancements, as exemplified by stone and metal axes, arrows and bows, were brought to Japan from the continent through Korea as an intermediate. Archaeology clearly reveals through the medium of physical artefacts this transmission of human material culture. Although Japan's internal cultural differences

were drastic, varying greatly by region, the influence of more sophisticated material culture coming from the Continent on the Japanese archipelago was great.

History books available in the UK talk about attempts made during the early modern period of Japan's history to abandon Buddhism. These history books typically explain that, with pressure from the West, Japan sought to modernise, basing its new direction upon Western lines. For the West, civility as a colonial justifying concept was accompanied by Christianity. Japan, however, refused to heed to this demand; Christianity became legal in Japan during the Meiji period in 1873, when the broader concept of freedom of religion was introduced. The Meiji government prioritised Shintoism over Christianity and Buddhism. When the Japanese government reintroduced the ancient conceptual religion of Shintoism for the purpose of solidifying its political power, it ironically followed precedents of nineteenth-century political tycoons in the West. Vivaly, this re-education and the rejection of the "old" led to the destruction and defacing of a great number of Buddhist temples. Physically in Japan, however, this phenomenon seemingly did not transpire. We visited a great number



歴史文化遺産サイト訪問（野毛大塚古墳をバックに記念撮影）

of Buddhist temples, of which many additionally held spaces for Shinto shrines and imagery. The rejection taught in history books henceforth was probably incorrect and a merger of these spiritualities occurred within the Japanese psyche.

Ultimately, history is the documentation of human progression. Understanding the past allows us to better grasp the present. This program allowed each of us to delve into Japanese heritage in an immersive first-hand environment for the furtherance of our own knowledge, as well as those we hope to educate.



「マンガにおけるアイヌ像」の講義を熱心に聞く参加者

4 受講者レポート ③

■ 日誌形式レポート

伊東希々、野田坂秀陽、福田建、松浦流音、安井靖雄

1日目—9月9日

夜中猛烈な雨と風をもたらした台風15号が通過した9月9日、プログラムが始まった。電車が止まっていた影響で東大生は5人中3人が本郷キャンパスでのミーティングに間に合わず、ホテルでやっと集まるというバラバラのスタートを切ったが、皆で浅草を散策するうちに話が弾んできた。イギリスの学生たちは浅草寺の雷門という「ザ・東京」のような光景を見て東京に来たと実感していたようだ。仲見世通りを奥に進み、本殿の前のお香がたかれているところでは煙を体にかけて病を治すという風習を面白がり、皆で頭にかけていた。ここであと1時



浅草寺・本殿前にて

間ほど時間があることがわかり、イギリス組が行きたがっているラーメン屋に行くことになった。しかし店には空席が足りず、あまりお腹の減っていない人たちは仲見世通りでお茶を飲むことにした。そこで飲んだ抹茶が甘く、イギリス人も日本人もびっくりした。そうしているうちに1時間が過ぎ、お互い何をしたのかを話しながら宿に戻ると夕食の時間になっていて、イギリス組は日本食を面白そうに食べていた。天ぷら用のだし汁を見て、イギリス人にも韓国人のTAさんにも用途がわからず、「これ何に使うの」と聞いていたのが印象的だった。

夕飯が終わると、元気な人は夜の上野公園へ散歩に行き、疲れた人は部屋で休んでいた。

2日目—9月10日

朝ごはんはみなバラバラに好きな時にホテルの下の料亭、または一階のカフェに食べに行った。この日から、一部のメンバーの朝のセブンイレブンコーヒーを買う習慣が始まった。9時に集合するとバスで本郷キャンパスに行き、設楽先生の縄文時代から古墳時代にかけての社会や文化についての講義を聞いた。日本の考古学発掘が明治時代以降にどのように進んだのか、どのような出土物があったのかなどについて説明していただいた。個人的に印象に残ったのは、縄文時代の土で作られたイヤリングがドーナツほどの大きさがあったことだ。また、ストーンヘンジのような石で形作られた墓がイギリスにも日本にもみられるという点も興味深く、どうしてこれほど離れ

た二地域で同じような構造物が見られるのか、ほかの国でも見られるのかなどの質問が多く集まった。細かいことはよくわからないようだが、それがゆえに一層私たちの興味をひいた。

その後、通常は公開されていない列品室で本物の出土物を見せてもらった。最も驚いたのは、先生が私たちにハンドアックスを触らせたり、手に持たせたりしてくれたことだ。貴重な出土物に触るとというのが初めての体験だったためか、非常に重く感じた。土器も様々なものを見せてくれて、縄文時代の典型的なもの、朝鮮や九州経由で進んだ文化を持つ西日本と古い文化が残る東日本の境目となった新潟で発掘された縄文模様が残る弥生土器、これから訪れる北海道で作られた北方民族文化の影響を受けた土器などを間近で見ながら、土器の多様性と違いを知った。中国の十二支が描かれた鏡や、甲骨文字が刻まれた甲骨、布銭や刀銭など教科書で見たものの実物を見たことに東大生は感動していた。

展示を見た後は両国に移動し、カレーや海鮮丼の昼ご飯を食べてから江戸東京博物館に向かった。館内は江戸時代の復元建物がずらりと並び、建築構造のモデルなどが詳しく解説されていた。英語のガイドさんがいたため、イギリス組も楽しめたようだ。約2時間にわたるガイドツアーが終わると、夕飯まで3時間ほど時間があつたため、建物の前から堂々と見えていたスカイツリーへ行くことになった。上には登らなかったが、下から見上げるスカイツリーの姿は迫力があつた。夕飯まではまだ時間があつたので、カフェに行くことにし、ソラマチの中にムーミンカフェを見つけて入った。皆ムーミンに詳しいわけではなかったが、ムーミンや、名前はわからないが見たことのあるキャラクターのマキアートが施されたラテにテンションが上がっていた。しかしゆっくりしていると夕飯の時間が迫っていることがわかり、急いで駅に向かった。



本郷キャンパスでの座学と見学実習
(考古学の座学を受ける参加者)

夕飯後は、イギリス人たちが居酒屋の雰囲気が好きだということで、アメ横の飲み屋に連れて行った。様々なおつまみを注文したが、味が好きなものがあったり、口に合わないものがあったりという反応を皆で面白がっていた。翌日は朝早く日光に行くことを考え、遅くまで居残らずに早めにホテルに戻った。



博物館・美術館での実習（江戸東京博物館で解説を受ける参加者）

3日目—9月11日

今日は日光まで遠出する日だ。眠い目をこすりながら、8時にホテルを出て特急に乗る浅草駅に向かった。浅草では、特急を待ちながら毎朝恒例のコーヒーを買う時間がとられた。だがいざ特急に乗るとカフェインの効き目が切れて眠ってしまい、あっという間に日光に着いた。日光の涼しさに喜びながら、東照宮まで徒歩とバスでたどり着いた。入口からライアン先生による英語の解説が始まり、イギリス組は興味深そうに東照宮を見ていた。東大生も、受験で日本史選択だった人が授業で習った寺や神社の特質を解説してくれたので、日光の奥深さと仲間の教養の広さに感動した。東照宮の金の装飾が輝く建物が多く、荘厳な雰囲気に息をのんだ。

昼ご飯は、昭和の雰囲気が残る古い食事処で日光の名産の湯葉を使ったラーメンやうどんを堪能した。激しい雨が降ったため、雨宿りもかねてゆっくりご飯を食べた。なぜ豆腐ではなく湯葉を作るのかという話で盛り上がったが、答えは不明のまま。雨が弱まると、徳川家光の神社と墓や、縁結びの神社を訪れ、少し早めに日光駅に戻った。日光駅の近くでもコーヒーを探そうということになって、近くのインスタ映え的なジェラート屋さんに行った。

東京に帰ってきて夕飯を食べた後は、夜の浅草に出かけた。人のいない浅草寺では、参道の長さやライトアップの美しさ、シャッターに描かれる日本の日常や伝統的な模様を描いた絵を楽しんだ。

4日目—9月12日

本日はガイドスにてお会いした松田先生の引率の下、等々力渓谷と野毛大塚古墳、多摩川台古墳群、多摩川浅間神社、インターメディアテックを訪問した。

まず等々力駅で降り、等々力渓谷を通過して野毛大塚古墳へと向かった。等々力渓谷帯は二十三区内でも有数の自然が豊かな地域であり、訪れた際も多くの人々が川沿いの散歩を楽しんでいた。周辺の木々から蝉の声がうるさく響いていたが、外国の学生にはあまり馴染みがないようで、「この大きな音は何？」と聞かれたのが記憶に残っている。

松田先生によると、野毛大塚古墳は発掘者が変死したとい

う噂から鎮魂のために神社が建てられ、一帯がゴルフ場として整備された後も野毛大塚古墳だけはしばらく拓かれなかったとのことだ。今日、古墳を説明する看板には考古学の専門的な情報しか書かれておらず、こうした地域に即した情報が書かれていないことの原因や意味を考えさせられた。

昼食後、多摩川駅に移動して多摩川台古墳群に向かった。こちらは複数の古墳が点在しており、野毛大塚古墳とはまた違った古墳のありかたを見ることができた。近くには古墳展示室があり、古墳がどのように建てられたかや副葬品の種類などについて学んだ。古墳群を訪れる際に、多摩川台公園の調布浄水場跡を整備した一角を通ったのだが、かつての公共施設がどのように現在に残っているのかが垣間見られて非常に興味深かった。その後、多摩川浅間神社を訪れた。この神社は古墳の上に建てられているという点で特徴的だと松田先生より伺った。

まだホテルに戻るには早い時間だったので、東京駅へと移り、インターメディアテックを見学した。このミュージアムでは、東京大学で使われていた学術標本や器具、学芸員の方々が作成した資料を見ることができた。館内では写真撮影が禁止されており、そうしたことを含めた博物館での展示のありかたについて考察することができた。

ホテルに帰宅し、夕食後は涼みがてら上野から本郷キャンパスに向かって散歩した。アイスを買いにコンビニに立ち寄ったのだが、好奇心から最中を買った外国の学生が美味しいと言っていて、何だか嬉しかった。

5日目—9月13日

午前中は上野公園を散策する日だ。美術館や博物館を見に何度か訪れたことのある上野公園だが、公園内の寺や神社、史跡は意識して考えたことのない人が多かった。史跡の展示方



歴史文化遺産サイト訪問（上野公園にて担当講師から解説を受ける参加者）

法を研究する松田先生いわく、多くの美術館の近くにあり訪れやすい点はとてもよいのだが、多くの人が気づかないということが残念だという。面白かったのは、京成の上野駅の近くにある清水観音堂というお寺が京都の清水寺になぞらえて作られており、本尊も京都からもたらされたという話で、確かに寺のつくり自体も山の上に張り出した作りが京都のものに似ていた。他にも、戦争のために顔以外は供出されてしまった大仏や、明治政府と戦った彰義隊の墓などの歴史を伝える史跡もあるこ

4 受講者レポート ③

とを知り、ただ気軽に遊びに行っていた上野の印象が変わった。昔は寛永寺の広大な建物があつたという場所に立つ東京国立博物館に行き、日本の考古学について丁寧でわかりやすい英訳付きの解説をみんな熱心に読みながら展示品を眺めた。

昼ご飯は、セインズベリー日本藝術研究所所長のサイモン・ケイナー先生とともに芸大の学食でスペシャルランチを楽しんだ。ハンバーグにスパゲッティ、チキンカツなどが含まれるランチで、ボリュームが多くておいしかった。午後は自由時間で、銀座の歌舞伎座に歌舞伎を見に行った。いろんな歴史的建造物を訪れて目の肥えた私たちには、歌舞伎座の日本の伝統と



サイモン・ケイナー博士と懇談する参加者（東京国立博物館にて）

西洋の近代技術が融合したような建物自体も面白く感じた。「沼津」という狂言を基にした演目を観た。現代日本人にとっても言葉はあまりわからないが、三味線の音や口上に日本の音楽の響きを感じ、演者の表情やしやべりの間の取り方を見ながら登場人物の感情を想像し、ストーリーを頑張つて読み取った。ただ、後でインターネットで調べてみたところ、自分の敵と自分自身が同じ母親の子供だったという衝撃的な話であつたことを知り、皆驚いた。暗い劇場で長い演目を観終えた私たちは、眠気を覚ますコーヒーを求めた。銀座仕様の高級感漂うドトールでテイクアウトしたのち、甘いものも食べたくなり、老舗の和菓子喫茶であんみつや日本風の練乳やイチゴシロップだけがかったシンプルなかき氷を楽しんだ。ここまででもう疲れてしまったため、寄り道をせずにホテルに戻った。夕飯を食べた後、東大生は新宿の歌舞伎町に出かけていく元気なイギリス組を見送ると、部屋に戻って各々の時間を過ごした。

6日目—9月14日

都内の美術館を巡るこの日のツアーは、日本の近現代の文化について最も幅広く学べた日だった。中世の絵巻物を研究する高岸先生とTAの方が来てくれたため、絵を中心にツアーが構成されていた。

最初の国立近代美術館では、日本のアニメを最前線で引っ張った高畑勲についての特別展を見た。先生方が子供時代を共に過ごしたハイジや赤毛のアンなどのアニメの制作途中のメモや作画を、目を輝かせて見ていた。われわれ学生たちは、彼の最後の作品であり50年近く構想を続けてきたという「かぐ

や姫の物語」を見てみたくなった。次は乃木坂に移動し、新国立美術館のカフェテリアで洋食のお昼ごはんを食べた。

午後最初の行程では、六本木のサントリー美術館でわびさび文化の器の展示を見た。展示物の中には国宝に指定されている茶碗もあつたが、高岸先生いわく、茶碗は見るだけでは良さがわからず、熱いお茶を入れたときに茶碗がどんな温度になるか、手に持った時にどんな質感なのかを体感してみないと品質がわからないということだったが、実際、展示を見るだけでは、なぜ国宝にされるほど価値があるのかわからなかった。ただ、なぜ、どこに価値があるのかを考える姿勢を持つことによって、展示品を注意深く見られるという点が面白かった。実際に使っている人たちは、どのようなことを考えて一点一点を作り、使ったのかなどを考えることができた。

この後は森美術館で塩田千春展を見ることになっていたが、入り口に行ってみると入場まで50分待ちということで、時間ももたないという話になり、六本木一丁目にある泉屋博物館分館を訪れることにした。同館では、高岸先生が興味をもっているいらっしゃつたという「文化財よ、永遠に」というテーマの文化財の復元、保存作業の過程を解説した展覧会を見た。絵を損なわないように絵巻物の裏の弱くなった台紙を交換するような地道な作業のおかげで、私たちが普段文化財に触れることができるのだと理解できた。余談になるが、この美術館で嬉しかった点は、お茶やスポーツドリンクなど様々な飲み物が備わつたドリンクバーを無料で使えたことで、全員ではしゃいでしまった。

盛りだくさんの行程を終えてもまだ時間が残つていたのだが、ここで公式の予定は終わり、少々自由時間を得た。北海道用のあたたかい服を持ってないメンバーたちは御徒町のユニクロに行くことにした。神谷町駅から日比谷線に乗り、仲御徒



博物館・美術館での実習（泉屋博物館にて記念撮影）

町駅を目指した。しかし話をしているうちに、気づくと上野に着いてしまつてた。仕方なく上野のユニクロに行ったが、規模が小さく、求めていた長袖は見つからなかった。これだけ歩き回つて疲れた私たちは、ホテルでご飯を食べるとすぐに寝てしまった。

7日目—9月15日

東京滞在最終日は、二つグループに分かれ谷根千の名所めぐりをした。最初に訪れたのは鶯谷の台東区立書道博物館で、

漢字の成り立ちについての展示を見ながら、甲骨文字の時代から始皇帝が文字を統一した際の小篆、近代日本の漢字まで、幅広く歴史を追うことができた。日本人にとっては日常使っている漢字をじっくり考えることができたし、イギリス人たちや韓国出身のTAさんにとっては、日本人という外国人がコミュニケーションをとる文字がどのような仕組みで成立したのかを学べる点を堪能している様子だった。

その後、谷中を歩きながら千駄木のCIBIというカフェにご飯を食べに行った。鶯谷から谷中へ抜ける道では大きな墓地があり、イギリスと日本の墓の違いについての会話が弾んだ。谷中には大正昭和の雰囲気が残る建物が多く残っていた。銭湯をアトリエに改装したスカイザバスハウスや、ロンドンにもあるという自転車屋トーキョーバイク(Tokyo Bike)の古い酒屋を改装した店舗は美しく、後者の店では、シンプルなデザインの自転車やロゴの入ったバッグが欲しくなってしまった。

1.5Kmほど歩いた後、オーストラリア発祥のカフェCIBIに着いた。メニューは予算を超える値段のものが多かったため、ほぼ全員が最も安いそばサラダを頼んだ。しゃきしゃきの野菜と塩気のきいたそばの組み合わせが結構美味しく、和洋折衷の文化も楽しめた。その後、近くの公園に整備されている岡倉天心の家の跡を見て、谷中銀座にて和風の茶碗や箸のお土産、コロッケなどを買い、それから書道博物館でポスターを見て面白そうと思った朝倉彫塑館を訪れた。同館の彫刻展示も建築装飾も独特なものが多く、日本の近代芸術の先駆者である朝倉文夫の個性が感じられた。その後、保護された猫が活躍する猫カフェに行った。猫のえさの鯉を注文したメンバーは、5-6匹の猫に囲まれながら幸せそうにご飯をあげていた。最後に訪れたのは、千代田区の小学校の廃校リフォームした美術館である。各教室が芸術家のアトリエになっており、モダンな絵や写真を見ながら多くの芸術家の作品に触れることができた。入場無料であるので、また行きたいと思った。この日の夜は、今日こそと御徒町のユニクロに行き、あたたかい洋服を買った。

8日目—9月16日

北海道に移動するこの日、ホテルの部屋から見えていたスカイツリーが見えないほどに厚い雲に空が覆われ、雨も降っていた。これからロシアに発掘調査に出かけるというTAの張さんとお別れし、我々は羽田空港に向かった。二時間も早く空港に着いたため、長々と飛行機の出発を待った。その待ち時間と比べると、二時間もかからない飛行機の乗車時間は一瞬のように感じられた。

北海道に着くと、日光に着いた時と同じように冷たい風に驚いた。低い山に囲まれた広大な農地の中の真っすぐな道路の中を一時間ほど車で走ると、常呂町のスーパーに着く。東京のスーパーと比べようとしたが、規模が若干小さいだけで、値段も売っているものもあまり違いがなかった。唯一の驚きは、5kgもの量で1パックになったでんぶんが売られていたことで、そんな量のでんぶんをどうするのか疑問に思った。

スーパーを出るとすぐに寮についた。上野のホテルと異なり、完全に個室でリラックスできると喜んだ。夜は常呂実習施設で

働いている先生と事務の方、地元の方で東大研究施設と長い付き合いのある方がウェルカムパーティーを開いてくれた。北海道の代表的な食べ物であるジンギスカンを楽しんだ。ラム肉(lamb)だとイギリス人に説明しようとしたら、うまく発音できず、お酒のラム(rum)だと思われてしまった。皆、大量の肉とラムの味に染まった玉ねぎと人参を「Delicious!」と言いながら食べまくった。地元の方は、この常呂町は北海道の中でも食料の生産が盛んで、ホタテや加工用ジャガイモがたくさん採れるということを教えてくれ、そのジャガイモを使ってイモ団子まで作ってくれた。イモ団子は北海道ではよく食べるものらしく、とてもおいしかったためレシピを聞いたところ、ふかしたジャガイモにでんぶんを加えて混ぜて焼くらしい。ここであのでんぶんを使うのか、と気づいた。やがてお腹がいっぱいになった私たちのほとんどは寝てしまった。眠くない数人はネットで映画を見ながら夜更かしした。

9日目—9月17日

涼しくて快適に眠れた後、前日に買った思い思いの朝ごはんをゆっくり食べた。午前中は、常呂実習施設で長年研究しているらっしゃる熊本先生による北海道の考古学についての講義を聞いた。北海道には本州の時代区分と異なり、弥生時代の代わりに縄文時代があり、縄文時代を受け継ぐ文化が続いた



ところ埋蔵文化財センターの見学

ことなどを学んだ。講義の後には、研究室の隣のところ資料陳列館に行った。同館の1階では常呂実習施設が成立した経緯が紹介されており、2階では付近で発掘された土器や動物をかたどった飾りが観察でき、3階では博物館学実習の授業で設計された企画展を見ることができた。常呂では、発掘から展示までの文化財にかかわるすべての仕事が行われているのだと実感した。

午後には、その仕事の一部である土器の接合を体験した。子供用の土器の複製品を使ったつがいのはっきり分かる形の割れ方と模様をした土器の接合を最初に体験した。これは簡単だと思ったのもつかの間、次に用意された、実際に先生たちが発掘した一辺が2-6cmほどの細かな土器の破片が大量に入った大きな箱の中からベアになると思われる破片同士を見つけていく作業は非常に根気が必要で、メンバーの笑顔が消えた。それでも、似たような厚さや模様であることを手掛かりに、

4 受講者レポート ③

各々1-2組のペアを頑張って見つけることができたが、考古学が簡単でないことを思い知り、今まで見てきた博物館の展示品を整備した方々に頭が下がる思いになった。

一時間ほど作業を続け、次第にペアが見つからずに頭が痛くなってきたところで、この作業は終わりとなり、続いて常呂町の博物館に連れて行ってもらった。この常呂町立郷土資料館は廃校になった小学校を地元の人の手によって常呂町の近代の歴史を紹介する博物館として活用されているもので、昭和時代に使われた家電や日用品が展示されていた。その中のソ連へ



博物館見学（常呂町郷土資料館にて）

向かう兵隊が使っていた軍服や従軍手帳の展示を見ていると、北海道が近代には軍事的に活用されてきたという歴史が思い出された。この後、実習施設の近くにあるサロマ湖とオホーツク海を隔てる幅1km程の砂州にある公園を訪れ、雄大なサロマ湖と砂州特有の花が咲く美しい景色を目に焼き付けた。

この日からは、夕飯がメンバーの手作りとなる。食べたいもののアイデアを出し合い、普段一人暮らしのメンバーが中心となって指揮を執り、十数人全員分のご飯を作る。カルボナーラとガーリックトースト、サラダがとてもスムーズに出来上がった。ご飯を食べ、東大生はジュースを飲みながら、お酒好きなイギリス人たちはスーパーで自腹を切って買って来た日本の日本酒、焼酎、梅酒、チューハイなど様々なお酒を楽しみながら、この日見たきれいな景色の話をしていると、オホーツク海で朝日を見たらきれいだろうと思いついた。翌朝早起きすることが決まる。

10日目—9月18日

5時4分の日の出時刻に合わせて、昨日の公園へサイクリングした。オホーツク海まではたどり着けなかったが、砂州の内側のサロマ湖は朝日が湖面に映っていて、とても美しかった。だが早めに宿舎に戻り、いつもより1時間早い集合時間に備えてもう一度寝た。

その後、8時半に集合して知床に向かった。1時間ほど車で走り、網走を越えたらすぐに浜小清水の原生花園に着いた。丘の上にあり展望台にもなっているが、曇りで景色はあまり楽しめなかった。しかし、浜の強い風と乾燥に耐える背の低い木々に咲く小さな花々は可愛らしく感じた。

車に戻ってもう30分ほど移動し、知床博物館を訪れた。先日の常呂町立郷土資料館と同じく昭和の日用品がたくさん展示

されていたほか、周辺の野生動物を模型やはく製を通して見ることができた。この地では特別天然記念物の大鷲が飛来することも知った。博物館の外には大きな檻があり、3羽の大鷲が近寄る私たちをじっと見つめていた。この大鷲は夏はアムール川周辺のロシアにいて、冬は寒さを逃れて北海道にやってくる。北海道に来た時に事故にあつてロシアに帰れなくなってしまった個体をここで保護しているらしい。彼らの威嚇する何とも言い難い不気味な鳴き声を聞きながら檻を離れ、再び車に乗って昼食をとる和食屋さんに行った。つぶ貝の天ぷらそばがお店のお勧めで、歯ごたえのあるつぶ貝はとでもおいしかった。

食べ終わるとさらに車を進め、知床半島に入った。半島を形成する山脈を横断する知床峠を海岸沿いから登っていく。落葉広葉樹が次第に針葉樹林に変わり、霧に覆われる山頂付近では低木だけになった。車から降り、濃い霧と太平洋側から強く吹き付ける風の中をすこし散歩した。東京の真冬くらいの気温で、寒い寒いと言いながら記念撮影をしてすぐに車に戻った。それから少し山を下り、国立公園内の知床五湖を見学した。長い遊歩道が整備されていて、今下ってきた山脈、オホーツク海、一面に広がる笹と原生の花、そしてどちらかと言えば湿地のようにも見える湖を見ながら散歩を楽しんだ。ここから山脈を見ると、南の太平洋側から吹く風が知床山脈で押し上げられて雲になっていて、オホーツク海側には雲が全くないことが見える。その後はまた車に乗って、オシンコシンの滝へ向かった。道端で草を食べる鹿がいて、北海道で初めて見る可愛い野生動物に車内から歓声が上がった。

オシンコシンの滝では、なだらかな岩の上を勢いよく水が流れていた。これで行程はすべて終わり、帰路についた。夕方遅い時間になってしまったので、途中の網走の大きなスーパーでそれぞれの夕飯を買った。みんなお寿司を買っていた。イギリス人たちはわさびが大好きなようで、無料のわさびパックを大量に持ち帰った。北海道のおいしい海鮮を食べて満足し、この日は早めに寝た。

11日目—9月19日

この日もゆっくり起き、9時半から勾玉作りを始めた。発掘される勾玉は固いヒスイでできているが、この体験ではもっと柔らかい白い滑石を素材にした。しかも削る作業には紙やすりを使った。これでも勾玉らしい形になるまで2時間も削り続けたのだが、勾玉を作っていた縄文時代の人たちはやすりもない上、もっと硬い石を使ってよくきれいな形の勾玉を作れたなあと感動した。2時間削り続けてやっと勾玉の形になった時には、何か作品を作り上げた気がして大きな達成感を得た。

午後には、翌日発掘作業をする予定の大島遺跡について熊木先生に説明をしてもらった。擦文文化の竪穴式住居が多く、この常呂一帯には3000軒もの住居跡があるらしい。講義を聞いた後、実際に住居跡を見学しに実習施設近くのところ遺跡の森へ行き、縄文文化からアイヌ文化へ至る変遷を学んだ。竪穴式住居の復元がとりわけ興味深く、中に入ると外から見るよりも広く感じられ、天井に窓も開いていて明るく快適だった。ただ、冬は寒そうだし、ここで暮らすのはどんな感じなのか、とても気になった。それから町の中心に行き、常呂遺跡を見学

した。一見するとただの森なのだが、よく見ると住居跡である大きなくぼみがたくさんあった。その一つ一つが住居跡なのだと考えると、遺跡が身近に感じられた。そこからトコロ貝塚に移動した。またしても一見するとただのピーツ畑になっている場所だったが、崖になっている部分を横からよく見てみると、大量の貝殻が表れていた。この地域では遺跡が身近に感じられることがよく分かった。この後は、おなじみのスーパーに行き、夕食と朝食の買い物をして宿舎に戻った。

12日目—9月20日

この日はようやく遺跡の発掘調査ができる日だと興奮しながら作業着を着て、車に乗った。しかし車で移動中、次第に雨が降ってきて、遺跡近くに着くと本格的に雨が降っていた。そこで発掘作業はできないという判断になって、寮にとんぼ返りした。急遽、午後から網走の博物館をめぐる予定に変更され、午前の残り時間はレポートを終わらせる時間となって、皆で食堂にてパソコン作業をした。

お昼ご飯を食べると、網走に移動して世界の北方民族の生活を紹介する北方民族博物館を訪れた。今まで習ったアイヌの知識と比較しながら、アイヌに限らずイヌイットやサミの生



博物館見学
(モヨロ貝塚館にてオホーツク文化の墓の説明を受ける参加者)

活様式を学習できた点がよかった。北方民族の生活の知恵には驚かされるものが多く、アザラシの腸でつくった防水服やサケの皮で作ったブーツを見ていると、その発想力に感銘を受けた。続いて、現役の博物館としては北海道で最も古い建物を持つ網走郷土博物館を訪れた。展示されている魚や動物のはく製はもちろんきれいだったが、それよりも年季の入った建物自体が面白く感じられた。そして最後に、東大が調査したモヨロ貝塚の博物館を訪れた。オホーツク文化の住居や墓が多くあり、死者の頭に土器を被せた独特の墓の形式に驚いた。

13日目—9月21日

昨日の雨のためにスケジュールが変更となり、午前中に博物館網走監獄を見学することになった。フランスの刑務所を範にしたという放射型の舎房及び中央見張所や囚人たちの心の拠り所となった教誨堂など、西洋の様式を取り入れながらもレンガの積み方など部分的に日本風の要素を組み込んだ建築物は、日本が近代化を急いでいた1890年に網走囚徒外役所(網

走監獄の前身)が建てられたという時代背景を考慮すると、非常に面白かった。また、浴場やレンガを焼いた窯、漬物庫や味噌・醤油蔵など、当時の受刑者のリアルな生活を垣間見ることのできる場所が多くあり、極めて興味深かった。

昼食後、待ちに待った発掘実習のため大島1遺跡へと向かった。講義で既に聞いていたことではあったが、現地に赴くと堅穴住居が尾根に沿って存在しているのが実感できた。二組に分かれて発掘を進めていったのだが、慣れないスコップとシャベルでの作業は思ったよりも大変で、かなり頻繁に先生方に代わってもらってしまった。遺物は一切出土しなかったが、掘り進めるにつれて土の色が変わっていき、それを見ただけで粘土層だろうか、火砕流だろうかと考察することができる先生方の博識さに舌を巻いた。結局固い地面の層まで行きついたので、3時半頃に発掘は終わりとなった。

今日の夕飯で出たジェノベーゼは大変美味しく、家でも作ろうとレシピを教えてもらった。このような情報交換ができるのも、このプログラムならではのだろう。

14日目—9月22日

昨日の夜遅くまでレポートを書いたり、それぞれの学校生活などを話したりして夜更かしていた私たちは、朝遅くまで寝てしまい、急いで朝食を食べて10時からライアン・ホームバーグ先生による日本の漫画についての講義を聞いた。部落民やアイヌの人など差別を受けた人に目を向けて物語を作った白土三平の作品を中心に、漫画での社会の描かれ方を学んだ。

午後には修了式が行われた。まるで卒業式のように一人ずつ名前が呼ばれ、重厚な青の台紙に張られた立派なプログラム修了書をもらった。思い返せば、東京の初日から2週間も経っていた。東京でも上野周辺から神奈川との県境の多摩川周辺まであちこち探索したり、北海道でも様々な博物館を訪れたり、研究所で土器や勾玉に触れたり、遺跡の発掘作業もしたりと、盛りだくさんだった。イギリス人学生との交流はもちろん、東大生のメンバーも出身や経歴が様々で、日本の文化についても知ることができたのは良い経験だったと思った。

この後は夜のフェアウェルパーティーまでレポート作成をするのみで、あとは自由時間でサイクリングに行ったり、近くのホテルの売店へお土産を買いに行ったりして、思い思いに過ごした。夕食は大きな鮭がオスメス1匹ずつ用意されており、TAの雨宮さんと國木田先生が捌いてくれて、ホットプレートで野菜と一緒に焼いた。柔らかい鮭が非常においしかった。ここで問題が一つあり、鮭の白子をどうするかという問題が生まれたが、先日の夕飯づくりに使った出汁の残りを使ってお吸い物を作ることにした。初めての白子料理だったが結構おいしくできた。パーティーでは一人ずつ、このプログラムで一番良かったこと、悪かったこと、笑えたことをそれぞれ発表した。今までの面白い出来事が思い出され、とても楽しい振り返りになった。

(文責：野田坂秀陽)

4 受講者レポート ④

■ テーマ別レポート

伊東希々、野田坂秀陽、福田建、松浦流音、安井靖雄

1. 学問の役割とは

この文学部夏期特別プログラムは、活動の内容や担当講師の専門を見ると、「考古学への誘い」とでも言うべきものであるように思われるし、実際私もそのように考えていた。それは決して間違っただけではなかったものの、私達は「考古学」の三文字に集約するにはあまりに多様な経験に彩られた二週間を過ごした。

このプログラムの前半では、東京を中心とした関東各所を訪れた。大学に入るまで高知で生まれ育った私の前にそびえた東京という都市は、私の好奇心の恰好的であった。私は春学期の間の友人との散策を通じて東京を分かった気になっていた。しかし、このプログラムで目にした東京は、これまでとは違った様態を眼前に晒していた。これまでに足を運んだことのある場所を含め、至る所に過去を現代に伝える史跡が残されていたことは、少なからず衝撃をもたらした。また、東京は知の集積地としての側面も露わにした。一日で何軒もの美術館や博物館を巡るというのは初めてで、展示物の多さと時間の制限ゆえに全てを見ることが出来ないという贅沢な苦悩を覚えた。自由時間を利用した外出や谷根千でのフィールドワークでは、外国の学生を案内するために東京の各地域を調べることになり、東京の持つ多様性について理解を深めることができた。

プログラムの後半では舞台を北海道に移し、講義や博物館での学習を通して北海道の文化や歴史を考察した。初めて足を踏み入れた北海道の景色は見慣れた町とは全く異なるもので、ひよろりとした白樺の林が自分は北の大地にいるのだとの実感を起こさせた。北海道はその歴史の多くにおいて狩猟・採集を中心とした暮らしが営まれていたという点で本州の歴史のありかたと大きく異なり、それゆえいわゆる「日本史」とはまた違った面白さが感じられる。熊木先生の講義では、出土

した遺跡から推測される人々の暮らしを教えていただいたが、遺物の痕跡から当時の生活が紐解かれてゆくさまには言葉にできない魅力があった。また、揭示物や博物館の展示にアイヌ文化に関する記述が多く見られ、アイヌというのが今なお北海道において一つの大きなテーマとなっていることが実感できた。

このように、複数性・連続性を持った膨大な情報が絶えず五感に働きかけてきたのが今回のプログラムであった。学問の世界にあつては、より普遍的な理論を求めて個々の出来事とたく捨象するきらいがある。そうして抽出されたものが高校



勾玉の製作体験

までの勉強で教えられる内容である。一方で、ロジックを形成するにあたって参照された具体例は、その各々が他の無数の要素とごちゃ混ぜになった重層的な存在である。知識を習得した上で改めて目の前にある現実を肌で感じる。そうすることで新たな視点を見つけ出すことができることを学んだ。

とりわけ私が深く考えるに至ったのは、過去の遺産の現代でのありかたについてだった。松田先生が行った地元の人々にとっての野毛大塚古墳の意味の説明や、斜里朱円周堤墓群で遺跡の保護のために盛り土がなされたという事実を通じて、遺跡はそれ単体で完結するのではなく、後世の人々との連関の中で次第に姿を変えながら受け継がれてゆくものであるとの意識が強まっていった。そして、その連関や遺跡の変容を許容した上で、共同体の一部分としての遺跡のありかたを模索していくことの重要性を強く感じた。これは目に見えるもののみではなく、伝統のような不可視の遺産についても同様である。現在のアイヌ文化は昔のアイヌ文化と同一のものではないが、双方のアイヌ文化を事実として認め尊重した上でこれからのアイヌ文化のありかたを考えるのが今求められているのだと思う。

末筆にはなったが、示唆に富んだ数多くの活動を提供してくれた、東京大学文学部をはじめ、先生方や事務の方々、このプログラム中お世話になった全ての方々への謝意を以てこのレポートの結びとさせていただきます。本当にありがとうございました。

(文責：福田建)



遺跡出土土器の接合体験

2. 人々にとっての死—葬法について

高校の日本史で先史時代を扱った時、正直なところ私はあまり興味を持つことができなかった。人名も政治的な出来事も滅多に登場せず、彼らが何を考え、どのような精神生活を送っていたかが茫漠としているように見えたのだ。しかし一つだけ、屈葬や伸展葬、甕棺などの説明には強く心を惹かれた。どんなに知が進歩しても、生きている者はどうしたって知り得ない死を、遙か昔の人類はどう捉えていたのか。故人の葬り方から、彼らの死に対する恐れ(畏れ)・信仰を垣間見ることができるような気がした。ここでは、本プログラムのまとめとして、本州とは異なる歴史区分を持つ北海道における墓や葬法について、簡単にまとめつつ考察したい。

縄文文化は本州から北海道にまで伝わった。そのため、墓に関する特徴も本州のものと同通っていることが認められ、常呂川河口遺跡には副葬品としてこの時代の土器も見つかっている。また、産地が新潟県糸魚川地域に限られるヒスイの勾玉も副葬品として出土しており、本州との交易の存在を示している。交易品すなわち稀少なものを副葬品として用いたのには、少なからず葬ることに対する畏敬や特別な意念があったと推察されよう。その後、本州が弥生・古墳時代に移行していく時期、北海道では狩猟・採集文化が継続し、続縄文時代とよばれる。この時代も同じく交易品であるガラス玉や鉄製の武器などが副葬され、その数は埋葬された人の社会的地位を反映していると考えられている。またこの頃から熊をかたどったものが出土しており、この頃から熊が祭事において重要な役割を持っていたことが伺える。

擦文時代に関しては、常呂の森資料館を訪れた際に、常呂の地には擦文時代前期の遺跡がないことを伺った。加えて、擦文時代はそもそも出土物が少なく、墓についても分かっていないことが多い。この時期、北海道の北半分にはサハリン方面からオホーツク人が渡来してオホーツク文化を築いているので、ここからはオホーツク文化において展開される墓制について述べる。オホーツク文化の墓で最も特徴的なのは被り甕で、これは土に埋めた故人の頭部に土器(甕)をかぶせるものだが、一定の場所にまとめて墓が造られていたこと・それらが全て同じ方向を向いていたことなども合わせて勘案すると、



実習施設周辺の遺跡見学 (ところ遺跡の森の住居跡)



実習施設周辺の遺跡見学 (ところ遺跡の森にて)

墓標のような役割を果たしていたとの仮説を立てることができる。副葬品としては金属製の武器や土器が挙げられるが、特筆すべきはそれらが意図的に壊されている例があったことだ。モヨロ貝塚館の説明書きによれば、壊すことは道具としての死を表し、故人と「死んだ」道具を共に埋葬することに儀礼的な意味があったと考えられるらしい。墓地が比較的住居に近いこと・穀物や日常用品が副葬品に転用されることなどは、現代における仏壇とお供物を想起させ、オホーツク文化の人々は死を異世界のものとして捉えず、死後も故人に対し親しみのようなものを抱いていたのではないかとふと思った。

オホーツク文化はやがて擦文文化と融合してトビニタイ文化となり、12-13世紀にはアイヌ文化へと移る。アイヌの墓は伸展葬が特徴で、副葬品は実用品からガラス玉などの装飾品まで多岐にわたっている。ここで興味深い風習についても言及しておく。アイヌ文化に見られる「送り場」の存在である。アイヌの人々は、動物や道具などに神の霊が宿していると考え、



遺跡発掘体験 (大島1遺跡にて)

利用し終わったそれらを神々の世界に送り返す儀式をそこで行なっていた。これは最も神聖な場所である竪穴住居のくぼみであることが多かったが、墓もしばしばそこに造られていた。このことが意味するのは、死が穢れではなく神聖なものとして捉えられていたこと、動物と同じように、人も「送る」べき存在と考えられていたことではないだろうか。

以上、北海道史における墓や葬法について述べた。大小の差異はあるが、いずれも儀礼的意味に富んでいることが印象深かった。これは現代における葬式にも言えることだが、甲

4 受講者レポート ④

う側の生者は未知の世界へと死者を送り出すからこそ、死者を丁重に扱い、畏怖の念を以って儀式をするのかもしれない。

土器のかけらから古代の人々の生活を自分のもののように捉えることは難しい。しかし、死という誰も「わからない」ものを通してみれば、彼らが確かに私たちと同じような感情を抱き、哀悼や畏怖の観念を育てていたことが垣間見える。それを想像した時、眼前の遺跡はただの昔の産物から、確かに自分と同じような人間が暮らしていた証に姿を変えるのではなかろうか。

(文責：伊東希々)

3. オホーツク人と美濃の陶工の「他者との出会い」

日本の歴史はしばしば「単一民族日本人の歴史」として語られてきたように感じる。各時代の文化の形成が、日本人が他



遺跡出土土器の接合体験

民族の文化を受容の後に独自に発展させるという文脈の中で説明されることは少なくない。しかし、今回文学部夏期特別プログラムに参加して、私の中に暗黙の了解のように存在していたこうした日本文化史に対する考え方は大転換を迫られるようになった。滞在中、北海道に古来から住んでいた擦文文化をもつ人々と、オホーツク人の文化が融合していく過程を目にした。そこでは私が普段何気なく抱いていた、単一民族の歴史としての日本史の捉え方は通用しなかった。

そこで、本レポートでは上述した北海道での文化の交流(ここでは融合、衝突の側面も含めると考える)と旧来私がかかっていた「日本人と他者」の文化の交流を比較したい。北海道の文化については過去に数多くの学説が展開されているが、僅か1週間の滞在で得られた知識には限りがあるため、ここではあくまでも私が現地で実際に土器を眼の前にした得た所感を中心とすることが最も意義深いと考えた。

まず土器を中心としたオホーツク人と北海道の歴史を簡単に述べる。本州の縄文文化は今から約2800年前、渡来人の影響を受けた稲作を中心とする弥生文化に遷移した。北海道の人々はその後も狩猟と採取の生活を続けながら縄文土器を作り続け、続縄文文化と呼ばれる文化が今から約1400年前ごろまで続いた。その後は現在の青森県北部も含めた一帯が本州の土師器(埴輪等に使われた素焼きの土器)の影響を受けた擦文土器を代表とする文化に遷移するが、今から約700年前になると本州からの鉄器の流入により北海道の人々は土器を

手放し、土器を持たないアイヌ文化が近代まで続く。この「北海道の人々」の一連の文化の中で、続縄文時代の終期から擦文時代の半ばにかけてサハリン周辺から道東地方に移動したのがオホーツク人だった。彼らは後期に見られる装飾的な「貼付紋」を特徴とするオホーツク土器に代表される独自の文化を発展させた。オホーツク人が土着の人々とのような交渉を持っていたかについては諸説あるが、交易を行っていたことは確かであるようだ。オホーツクで土器が死者の埋葬に用いられていたことを踏まえると、オホーツク人にとって土器は日用品に止まらない大きな意味をもつ存在だったとみられる。内陸部で製作された、オホーツク土器と擦文土器の融合とされるトビニタイ土器は、擦文土器の形状を取り入れた一方、海獣の装飾を失いながらも線状の装飾を維持した。トビニタイ文化の展開は未解明な部分が多く、擦文文化に吸収されたという見方もある。そもそもこの文化の担い手がオホーツク人だったのか擦文文化の民だったかも諸説あるため、受容の積極性については慎重に検討する必要があるが、オホーツク人に見られた文化の衝突の一つの見方として、融合への過程という視点は重要だと考えた。

一方で、六本木のサントリー美術館「黄瀬戸・瀬戸黒・志野・織部―美濃の茶陶」で見られた黄瀬戸焼は、北海道とは違った形の文化の交流を示していた。安土桃山時代に美濃国で製造された陶器は鉄釉(黄)や銅釉(緑)の地に鉄絵(茶等)で描かれた模様をもつと同時に、初期の作風には(柑橘類のように口が膨らんだ)柑子口をもつ花瓶等に中国の元・明時代の磁器の模倣が見られる。しかし美濃焼全体を考えると、中国磁器の意匠は全面的に受け入れたというよりむしろ、時代を下につれて考案される新たな技法(二種の釉薬を掛け分ける「片身代わり」等)のインスピレーションとして利用されたように感じられた。ここには器を通じて美を追求する陶工の姿勢が見受けられるように思える。

文化の衝突の様相を比較すると、北海道では融合の例、本州では独自化のための利用の例が見られた。この二つの例から北海道と本州の地域差が定義できる訳ではないが、オホーツク人と美濃の陶工はどちらも器を日用品以上の存在として捉えていたことを考えると、前者の土器が徐々に擦文文化と融合し、さらに擦文文化人が土器を手放してしまったことには



博物館見学(北海道立北方民族博物館にて)

驚きを感じた。彼らの土器の変遷に関する謎に取り組むことで、本州の歴史は相対視され、本州中心史観に風穴を開けられるのではないだろうか。今回興味を抱いたオホーツク人の暮らしぶりについては、これからも文献等を用いて独自に調べていけたらと思う。(文責:松浦流音)



附属常呂資料陳列館を見学

4. オホーツク文化について

私は、昭和から平成に代わった年に北海道余市で魚雷艇の砲雷長(射撃と魚雷を担当する幹部)として勤務していた。わずか一年半の勤務の初めての北海道勤務であった。その後北海道が任地となることはなかった。余市から小樽や札幌は比較的近いので、週末によく出かけたものであった。余市、小樽、札幌のほかには、函館、旭川、稚内、利尻島、礼文島、釧路などを訪れたが、北見市、網走市、知床半島には行ったことがなく、今回とても楽しみにしていた。そして私なりに大きな成果があったと考える。

その成果の中でも最も大きなものは「オホーツク文化」というものの存在を知ったことである。オホーツク海は知っていたが、オホーツク文化は全く知らなかった。本州では、縄文文化が衰えた後、弥生文化が始まった。北海道も同じようなものかと漠然と考えていたのだが、違っていたのである。

北海道では縄文文化(約8000年-2000年前)に続いて、石器のほかに鉄器も使用する続縄文文化(1200-800年前)が広まっている。そののち、5-9世紀北海道では北からオホーツク文化が広がっていき、南では本州の影響を受けた擦文文化ができあがった。

オホーツク文化は北海道、樺太(サハリン)、千島列島などのオホーツク海沿岸に広く見られるものである。海岸や河口の近くに住んでいた人々は、アザラシ、オットセイ、クジラなどを銜で捕ったり、網で魚を捕ったりする生活をしていた。また、クマ、シカ、キツネなどの動物を捕り、ブタも飼育していた。ロシアのアムール川流域や中国の黒竜江流域の遺跡からはオホーツク文化の青銅製品、耳飾りや鉄器とよく似た遺物が数多く発見され、大陸の人々と深い交流があったことがわかっている。

特徴的なことはいろいろあるが、モヨロ貝塚で、私は特に

住居と墓に興味を持った。住居は細長い五角形か六角形のかたちをしている。縄文文化、続縄文文化の住居は、通常、正方形や長方形である。なぜ五角形か六角形になっているかは不明である。住居の奥に動物を祭る骨塚がある。骨塚はクマが最も多くシカ、キツネなどもある。ヒグマ110体分の骨が祭られている家も見つかっている。墓では、手、足を折り曲げて、埋葬された人の頭の上に土器を逆さまに被せる「かぶりかめ」と称する方法で埋葬されている。「かぶりかめ」の一部が地上に出るようになっており、どこに墓があるか容易にわかるようになっているのである。葬られた死者(もちろん土葬である)の頭は、北西の方角を向いていて、傍らには生前使用していたと思われる鉄の小刀が置かれている。なぜ「かぶりかめ」をするのか、なぜ死者の頭が北西を向いているのかは不明である。オホーツク文化を荷った人々は樺太(サハリン)のニブヒ、樺太アイヌ、アムール川河口の周辺のウリチ族などと考えられているが、不明な点の多い謎の民族とされている。北海道の北に存在していたオホーツク文化は、南からきた擦文文化と一緒にトビニタイ文化を作るが、そのうちに消えていくのである。

全く素人であるが、私なりのオホーツク文化の人々に関する



博物館見学(モヨロ貝塚館にて復元された貝塚の展示を見る参加者)

印象を述べると、海に深い関係を持つ生活を送り海での漁や舟の運航にも長けていた、非常に個性的で理知的な、独特な宗教観を持った人々だったのではないかと考える。今回、このプログラムで多くの博物館を訪ねオホーツク文化を直接知ることができたことは、私にとって大きな収穫であった。今後も、オホーツク文化を中心に関心のある部分の知識を少しずつ広げていきたいと考える。

【参考文献】

「常呂川のほとりに暮らした人々」(2002)北海道常呂町教育委員会。

「丘に眠るオホーツク文化」(2018)斜里町知床博物館。

(文責:安井靖雄)

夏の本郷と常呂

今年も夏の文学部特別プログラムが無事終了した。今回は、英国から3名、シンガポールから1名の学部学生を迎え、東大からは教養学部前期課程4名と文学部生1名の5名が参加した。昨年とほぼ同様の9月9日から23日までの15日間、文字通り寝食をともにしながらのプログラムを体験してもらった。昨年はプログラム開始直前に北海道厚真町付近を震源とする最大震度7の大地震が起きて慌てたが、今年も開始前日に台風15号が東京を直撃して大きな被害を与えた。それでも翌日には受講生全員が揃い、おおむね大過なく無事プログラムを終了することができた。

本プログラムは、主として考古学と文化資源学に関する学習を通して、さまざまな現地体験を共有しながら、日本とヨーロッパの学部学生に国際交流の実を体得してもらうことを主眼としている。今年も前半の東京の部(9月9日～15日)では、東京の代表的な博物館(東京国立博物館・江戸東京博物館・東大インターメディアテク等)、美術館(東京国立近代美術館・サントリー美術館・泉屋博古館分館等)の施設や展示を担当講師の解説付きで見学し、1日日光に出かけた。上野公園や野毛大塚古墳・多摩川台古墳群・等々力溪谷といった歴史文化遺産にも出かけた。日光見学は、海外からの受講者にはすこぶる評判がよい。根津・谷中・千駄木といった下町でのグループワークでは、各自の希望によって書道博物館・朝倉彫塑館・六義園・根津神社等を訪問し、東大生が海外の学生に対して歴史文化遺産の意義を英語で熱心に説明する等、東大生と海外からの受講生が親密になるよい機会を提供している。

全期間を通じて、東大生と外国からの参加学生を区別せず、東京では上野のホテルで、後半の人文社会系研究科付属常呂実習施設では学生宿舎で同室してもらった。最初はどこかぎこちなかった学生たちも、2週間にわたって同室する

体験を通じて、次第にお互いを理解しあうようになった。プログラム終了後も相互の関係はずっと継続していると聞く。座学・実習はもちろん、日常会話は全て英語が基本である。定員10名という受講生の数は、プログラムの効果を最大限に高めるのにほどよい規模と思っている。

後半の常呂(9月16日～23日)では、道東という立地から、一転して朝晩は肌寒く感じるほどの冷涼な天候のもと、北海道の先住民が残した擦文時代の遺跡の体験発掘や付属の資料陳列館や考古資料を利用した体験学習、地域の遺跡・博物館の見学等を通じた社会連携の具体を知る機会を得た。講義や実習見学では、東大生もほとんど知らない北海道の独特の歴史を、実際の遺跡や遺物を前にして、文字通り体感しながら学ぶことができたはずである。常呂実習施設での朝晩の食事は、食材の買い出しから食器洗いまで、日欧双方の学生ペアによる自炊であり、交流の実を上げる格好の機会となった。

本プログラムの実施は、2015年1月に英国セインズベリー日本藝術研究所と文学部との間で締結した部局間国際交流協定に基づいている。夏は東京と常呂に英国をはじめとする海外からの学生(5人)を招いてプログラムを実施し、冬は英国に東大の学部生5人を同期間(2月、15日間)派遣している。本プログラムは、文学部だけではなく、広く前期・後期課程の全学部に開放されているので、来冬も多数の参加希望者があるだろう。本プログラムは今年度で最初の6年間を終え、来年度からは実施時期や内容を一新し、より充実させた新たな段階を迎えることになるため、現在その準備を進めている。

末筆ながら、参加・担当・協力いただいた全ての教職員・TA・関係者の皆様に深謝いたします。

東京大学大学院人文社会系研究科・教授

佐藤 宏之



(山上あかね撮影)

東京大学大学院人文社会系研究科・文学部

東京大学大学院人文社会系研究科附属
北海文化研究常呂実習施設

〒093-0216 北海道北見市常呂町字栄浦376



東京大学 本郷キャンパス

〒113-0033 文京区本郷7-3-1



セインズベリー日本藝術研究所

ノーフォーク州ノリッチ



ロンドン ●

**2019年度
文学部夏期特別プログラム
(報告書)**

編集発行 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部
〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

発行日 2019年12月4日

印刷 ヨシダ印刷株式会社





オホーツク海の朝焼け



常呂資料陳列館

東大文  SAINSBURY INSTITUTE
For the Study of Japanese Arts and Cultures
セインズベリー日本藝術研究所

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/>



サロマ湖展望台からオホーツク海を望む